

専門的意義と日常的意義

豊川 裕之

東邦大学医学部公衆衛生学教室・教授

雲仙の普賢岳の噴火は、多くの犠牲を出して、今なお不気味な状態が続いている。先に、伊豆大島、阿蘇山等の火山が再び噴火をしたことも記憶に新しい。そして、イラクのクウェート侵攻のときもそうだったが、専門家や消息通が各種のマスコミに登場して、いろいろと解説するのを聴くときに、しばしば抱く印象がある。地震と火山に関しては、「よくもこれだけ大胆に説明したり、予知したりできるものだ」ということである。

地震予知で、いつも連想することは、ウシやウマが巧妙に——人間にはできないことだが——皮膚をピクピク、ピクピクと連続的に動かしてハエやアブを追い払う仕草である。人間にとってどんなに大地震であっても、ハエやアブにとってのウシやウマの皮膚振動ほどには激震とはいえないだろう。そして、人間が呼吸するときの腹部や胸部の動きにはリズムがあって、そこには規則性があるけれども、ウシやウマが皮膚をピクピクと振動させる動きには規則性などはない。地球表面の地震や噴火にしてもこれと同じであって、規則性を求めることは難しいはずだが、解説者や一部の学者はその懸念が汲み取れない発言をしていることがある。

もっとも、考古学者と話していて驚かされたことがある。それは「地球の温度が1世紀の間に急に2°Cも下がった……」という表現であった。この程度の変化が急にといえるかどうか、私には問題だったのだ。素人の感覚では、とても急になどといえないが、専門家にとって

は、まさに急激な温度変化に相当するものらしい。同じように、判断基準のギャップが地震予知の場合にも当てはまるはずである。

このように専門家の認識や表現には、素人が日常生活で用いる意味とは異なる専門的意味を含むことがある。ところが、この場合の「急に」がそうであるように、見かけは日常会話のそれと同じであるから、よほど注意しないと専門的意味と日常の意味を混同することが少なくない。殊に、扇動的に騒ぎ立てることが目的だったり、好都合であったりすると、その混同を利用することさえ起こりかねない。

しかし、このような誤解や混同による世論操作の面よりも、もっと重要な問題が、専門的意義と日常的意義の間のギャップに潜んでいる。それは、専門的意義が常に正しくて、日常的意義がいつも誤っているとは限らないということである。素人のあさましさなどという自己卑下が日常的に行なわれて、専門家が高邁な考えをもつと思われているが、功名心や利権がらみや出世欲に駆られた専門家はいつでも直ぐに「鹿を追う猟師、山を見ず」になってしまうおそれがある。客観的に観察し、科学的に実験研究した結果に基づいているといっても、思い違いもあれば、ごまかしもあるおそれがある。ましてや、科学的方法自体にも弱点があり、科学する人の不完全さだけの責任ではないこともある。

そうであれば、看護婦・助産婦の業務のなかにある日常性や常識的処置を軽視してはいないか、という反省が生じてこよう。